『論文要旨』

『万葉集』と中国古典文学との比較研究

——詠物の表現を中心に——

一橋大学大学院言語社会研究科

博士後期課程

LD151010

孫瑋

本研究は、『万葉集』における花鳥の歌と漢詩との異なりに注目し、『万葉集』独自の花鳥の像を探るものである。

研究方法として、まず、初唐までの詩文における「梅」「鶯」「雁」の用例を年代順に分析し、「梅」「鶯」「雁」の表現史を確認してきた。また、『万葉集』における花鳥の間に見られる恋情がいかに表現されたかについて、それぞれの花鳥の歌が展開していく上で重要な作品に絞りつつ検討してきた。さらに、漢詩における花鳥の全体像を概観し、その上で『万葉集』における動植物とそこに擬された恋愛関係が、独自の発想であることを証した。

先行研究として、まず、小島憲之氏は「出典論」という立場に立ち、上代日本文学における花鳥の擬人化が初唐の傾向を受容したと指摘している。また、井手氏は記紀歌謡と六朝、初唐の詩における花鳥に目を向け、『万葉集』における花鳥の取り合わせが漢詩から受容したこと、各時期における花鳥の様相が異なることを論じている。さらに、芳賀紀雄氏は詩的表現が歌に受け入れられた過程を考察し、漢詩からの詠物的な態度の受容について詳しく論じ、「梅花宴歌」の重要性を指摘している。先行研究により、『万葉集』における花鳥の取り合わせが六朝と初唐の詩文から受容したことが明らかになり、花鳥歌の流れを把握する上で極めて示唆的である。

一方、花鳥の歌と漢詩との差異に注目する研究がほぼ見当たらない。本研究は、その差異を最も浮き彫りにする、恋情に関わる花鳥の歌を取り上げ、それぞれ取り合わせごとにどのように展開していくかを明らかにした上で『万葉集』における花鳥歌の全体像を把握した。花鳥の歌における恋情との結びつきに絞りつつ、『万葉集』における詠物的な表現の受容を考えてきた一方、漢詩と異なった『万葉集』独自の花鳥の世界を解釈するということに目的がある。

具体的な考察過程は以下のように示す。

第一部では、初唐までの詩文における「梅」「鶯」「雁」について時代順に用例を分析し、語の表現史を確認してきた。その結果、各表現がそれぞれの時代にどのように詠まれていくか、を細部まで把握することができ、詠み方の変遷の流れも解き明かしてきた。

第一章では、「梅」の表現史を確認してきた。六朝に始まり、梁以降に隆盛になり、陳を経て初唐に入ると、詠みぶりがより細緻的になっていくという「梅」詩の流れを明らかにした一方、「梅花詩」が「詠物詩」の展開と軌を一にすること、「閨怨詩」「辺塞詩」「侍宴詩」の展開と相まって発展してきたことを論じてきた。

第二章では、「鶯」の表現史を考察してきた。漢詩における「鶯」は鳴き声が人々に賞美されていく一方、春の花と共に美的に捉えられ、美しい花鳥の世界を紡ぎ出している。詠物詩の展開とともに「鶯」の詠みぶりの展開を確認してきた。

第三章では、「雁」の表現史を考察してきた。「梅」「鶯」が六朝に入ってから詠まれてい

くのと異なり、「雁」の詩における主流となるような悲秋との結びつきは、宋玉の「九辯」から始まった。魏晋になって、「雁」は悲秋との結びつきのほか、悲しみを増すもの、望郷の思いを募らせるもの、辺塞を表すものとして定着してきた。一方、景として賞美された「雁」も晋以降の詩文に現れてきた。陳あたりになって、「雁」は「悲秋」の思いを募らせる一方、秋の美を代表できる景としても捉えられていることを確認してきた。

第二部では、第一部で考察した漢詩の表現史を踏まえた上、『万葉集』における梅と鶯、ホトトギスと卯の花・花橘、雁と萩・黄葉との取り合わせにおける恋情との結びつきを考察してきた。

第一章では、まず巻五の天平二年の「梅花歌三十二首」の序文における「落梅之篇」について検討してきた。漢詩における「落梅」という言葉が特に楽府「梅花落」を指すことを踏まえ、「落梅之篇」という表現は漢詩の楽府「梅花落」を指す可能性が最も高いことを前提として述べ、歌に詠まれている具体的な表現が楽府「梅花落」以外の漢詩からも摂取したことを踏まえ、「梅花歌三十二首」は「梅」の詩を一般的に受容したものである、と論じてきた。

続けて、「梅花歌三十二首」を中心に、梅と鶯との取り合わせを考察し、鶯が梅の花の散ることを「惜し」む（五・八二四、八四五）、梅の花が鶯を「なつ」こうとする（同・八三七）、梅が鶯の鳴き声を聞くと花を咲かせる、また鶯の鳴き声を待ちかねながらも花を散らさない（同・八四五）、など歌の表現により、鶯と梅の間に愛し合う恋人の関係が擬されたことを確認した。特に、「惜しむ」という表現はのちに第三章で考察したように、花鳥の歌で共通する表現として頻繁に詠まれている。

第二章では、梅と鶯に先立つ、神亀五年の堅魚歌（八・一四七二）と旅人歌（同・一四七三）に詠み込まれているほととぎすと卯の花・花橘を考察した。堅魚歌と旅人歌の先蹤として考えられるのは、高橋虫麻呂の「詠二霍公鳥一」（九・一七五五、一七五六）であろうが、ほととぎすと花の間にあからさまに恋愛関係を擬したのは、堅魚・旅人歌を待たなければならない。堅魚歌は、ほととぎすを卯の花の「トモ」と捉え、両者が常に相伴う関係を示している。一方、旅人歌は、卯の花を離れ、人里の散ってしまった花橘を用いて和し、花橘を「片恋」しつつ鳴くほととぎすを造型している。それは、亡妻経験という特殊な背景のもとで詠んだが、ほととぎすと花橘を夫婦関係と規定する点に注目したい。天平期に入って、ほととぎすと花が主に賞美される景物となっていく一方、花鳥が能動的に行動するように詠まれていく姿勢は、この虫麻呂歌、特に堅魚・旅人歌から受け継がれたものだ、と考察を加えた。

第三章では、天平十年の「橘奈良麻呂宴歌」（八・一五八一～一五九一）を中心に、『万葉集』における「黄葉」について考察してきた。漢籍ど同様に秋の寂寥感をもたらす例も見られる一方、『万葉集』における「黄葉」は春の「花」と一緒に秋の景として賞美されてもい

る。「橘奈良麻呂宴歌」における「惜シ」「手折ル」「カザス」「ニホハス」などの表現を考察することにより、『万葉集』における「黄葉」が花のように眺め愛でられていることを明らかにしつつ、橘奈良麻呂の宴に詠まれた「黄葉」が辺り一面を照らすほど美しいものであることも推測できる。この結論を踏まえ、『万葉集』における「雁」と「黄葉」との取り合わせも、広い意味での花鳥歌として捉えた。

第四章では、ホトトギスの歌にすでに現れた花鳥と恋情との結びつきを汲み、かつ、「梅花宴」以降、花鳥の取り合わせが盛んになっていく趨勢において、雁と萩、雁と黄葉も恋情と結びついて詠まれた歌が現れたことを考察してきた。

雁と萩の場合は、結婚する意味の「逢ふ」で両者の婚姻関係を示したり（十・二一二六・秋雑歌）、雁を待ってその鳴き声を合図に花を咲かせるという構図を採用したり（同・二二七六・秋相聞）、あるいは、よそのところに行く「雁」を「留」めようとする「秋萩」を詠んだりするような姿勢から、両者の間に広く存在する「恋」を読み取れる。一方、「雁」と「黄葉」の場合は、両者の継起並存することを示す「ナヘ」（八・一五四〇・聖武天皇）、及び「雁」の歌における「寒し」が恋人の不在によってもたらされた孤独感を持つことを合わせて考えると、「雁」の鳴き声から植物が寒々と感じて色づく、すなわち両者を恋人のように捉えることも可能であろうと結論した。ここまでは、梅と鶯、ホトトギスと花橘・卯の花、雁と萩・黄葉に、それぞれ恋情を表す表現や度合いが異なりつつも、詩的表現によって花鳥の慕い合う世界を髣髴とさせることを明らかにした。

第五章では、さらに漢詩における花鳥の像、及び『日本書紀』『風土記』などの上代文学に目を向けつつ、『万葉集』における動植物とそこに擬された恋愛関係が、独自の発想であることを論究してきた。

まず、漢詩における花鳥の像を分析した上、「待」「留」「恋」「相依」などの表現により、花鳥の間に恋愛関係が確認できるのも確かに存在しているものの、詩的表現としての花鳥の取り合わせが、主に春の美景として描かれたり「思春」の気持ちを募らせたりし、春という季節感と緊密に関わっていることが判明してきた。

また、漢詩における花鳥の像と比較しすれば、花鳥の歌における恋情との結びつきは、詩的表現の摂取を前提にしつつ、意識的に花鳥の恋情を描こうとする姿勢や、花が鳥の訪れを待っているという花鳥の世界の構築が、『万葉集』独自のものである、という結論をつけている。このように、『万葉集』における花鳥は、漢詩から受容しつつ、花鳥の慕い合う世界を形成していくことを確認してきた。

さらに、花鳥の歌に先立つ「鹿」と「萩」との取り合わせからその発想の源を検討してきた。漢籍にも『万葉集』にも動物の恋情を詠んでいるものが見られるが、『万葉集』においては動物の「ツマ恋」へ多大な関心を寄せているところに特徴があることを指摘した。その

結果、花鳥の間に詠み込まれている恋情との結びつきは、詩的表現や方法を受容したことは前提にありつつ、動物が妻を求めようとする『万葉集』に古くからある発想を受け継いだ結果でもあることが、明らかになった。

本研究の成果として、まず漢詩の表現史を明らかにし、花鳥詩の全体像も把握したことが挙げられる。具体的な表現の変遷までも明らかにしたことは、花鳥の受容する様相を考える際に有力な根拠を与えると考えられる。

また、漢詩と比較することで、梅と鶯、ホトトギスと卯の花・花橘、雁と秋萩・黄葉は『万葉集』においていかに恋情と結びついて詠まれていたかを明らかにしてきた。詠物詩の一環としての花鳥の歌が、漢詩から刺激を受けつつ、そしていかにして『万葉集』固有の発想を踏まえて発展されたのか、を改めて考察することにより、花鳥の歌に関する新しい解釈を示している。歌において花鳥の恋情を詠むためには、詩的表現が不可欠であろう。にもかかわらず、そこに詠み込まれている花鳥の恋情に寄せた関心は、第二期から詠まれている鹿と秋萩を受け継いだものであった。さらに遡れば、『万葉集』一般に詠まれている動物の「妻恋」、及び『日本書紀』『風土記』にある記事に現れた鹿の妻恋への関心などが、その発想の源として考えられた。漢詩から多大な影響を受けたと思われる花鳥の取り合わせにも、『万葉集』の独自性が現れていることを提言した。